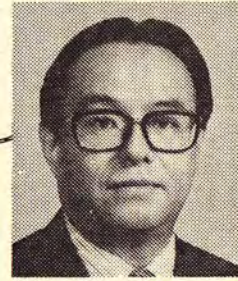


# 世界を語る

## 米ソ接近と世界情勢

### 「深部の潮流」見きわめが重要

東京外国語大学教授 中嶋 嶺 雄



#### 世界は経済の

#### 時代に移行

ほぼ予想通りに米ソ間のINF交渉が妥協し、米ソ関係に大きな転機が訪れた。このことは二十世紀を通じて世界を主導してきた米ソ両軍事超大国の時代がいよいよ終焉しつつあることを示しており、現代世界は軍事よりも経済への時代へと移行しつつあることを象徴的に物語っている。

この点で、歴史的なゴルバチョフ訪米が十二月八日、つまり太平洋戦争勃発のパール・ハーバーの日であったという偶然は意味深い。なぜなら、今回の米ソ接近の背景には、肥大化した軍事コストに悩む米ソ両首脳が、軍事小国・経済大国日本をはじめ台湾、韓国など東アジアの目覚ましい経済の台頭に奇立ち、そのことが米ソの軍縮への方向を誘ったと思われる蓋然性（がいせんせい）があるからだ。

いずれにせよ、国際社会におけるアメリカ力の相対的な弱体化がますます目立ちつつあるのだが、その象徴的な事例が、二、七〇〇億米ドルにもほるアメリカの対外債務問題である。しかもいわゆる双子の赤字といわれる財政赤字、貿易収支赤字の改善については、その前進がきわめて厳しい。こうした点から見ても、レーガノミックスと言われた、安い政府による強いアメリカの再建という目標がレーガン大統領の任期八年間をもつてしてもついに実現できないことが明らかになってきた。

一方、ベレストロイカを掲げて登場したゴルバチョフ・ソ連の側も、今や大きく変貌しつつある。ソ連は、東欧の衛星諸国やアフガニスタン、ベトナム、キューバ、アンゴラなどの同盟国に、毎年四〇〇億米ドルにのぼる援助金を出していると言われる。これに世界各地に駐在するソ連の軍事顧問団などへの必要コスト約一〇〇億米ドルを加えると、ソ連は自己の世界戦略維持のために計五〇〇億米ドルもの巨額の資金を支出していると推計できる。ソ連国内の核ミサイル開発及び通常兵力に要する費用がどれだけのかは推定しにくいところだが、恐らく数百米ドルは下らないものと見られ、このような巨大な援助や軍事支出は、ソ連にとつて不可能になってきているばかりか、そのような支出を行っても、ソ連の世界戦略は成功

が、最大の特徴点である。インフレの鎮静とともに変動相場制の弊害が一段と大きくなったのも、同時に進んだ過程である。世界で最も有効なインフレ鎮静を実現した日本は、民間企業を持つ世界に冠たる競争力の強さに支えられ、急速な技術開発に成功し、同時に円高を金融資産の増加に結びつけることに成功した。一九八〇年代に入ってから、日本は世界一の「金融大国」に変身、同時に

この政治不信を解決するには、大胆な行動が必要である。米ソ首脳会談の成功に加え、米国政府がさらに本格的な政策の転換を、国防を含めて全ての面で断行する姿勢を示さないと、市場は先行きへの不安感を解消しようとしないう。それは極めて困難な課題である。しかし、この決断に踏み切る以外に、世界経済再構築に成功できる見通しはない。

しているとはいえないのだ。この点を認識しているゴルバチョフ書記長は、いまブレジネフ型戦略からの根本的な転換をはかりつつある。

さて、そのような状況を考えると、やはりアメリカとソ連は米ソ関係をつなぐ緊張緩和の糸を今後断ち切ることはできないであろう。では、このような米ソ接近下で、アジアの国際環境はどうなるのであろうか。まず第一に、肝心の日中関係を見ると、日中貿易の不均衡は、中国の産業構造の転換が行われない限り是正できないという構造的なものになってきている。中国と日本とのビジネス・フリクション、商的紛争はこのところ増大の一途をたどっており、こうした現実を考えたただでも日中関係は樂觀できないと思う。

そこへもつてきて光華審裁判の問題があり、この点でも日中関係の前途を冷静に見ておいた方がよいのではなからうか（これらの日中関係について詳しくは新刊の拙著「中国に呪縛される日本」、文藝春秋、一九八七年、参照）。

#### 国際環境は変わる

次に米中関係であるが、今後米ソ関係の打開がさらにはかかれていくだろうと思われるだけに、アメリカにとつて中国を戦略的・軍事的に育成してソ連に対抗させる必要がなくなってくる。こうして米中関係も従来とはかなり違って冷えてくるのではないかと思われる。

このようになる、やはり中ソ関係が重要になるが、中ソ改善のピッチはさらに急速になろう。中ソ間の鉄道も、新しく二本敷設される工事が間もなく進捗するようであり、中ソ間の貿易、技術協力、国境貿易その他も順調に進展している。ベレストロイカを進めるゴルバチョフ体制下のソ連、経済改革を進める鄧小平・趙紫陽体制の中国は、いずれも内部に抵抗を持ちながら、おたがいに共通の課題を抱えている。そうした共通性が、中ソをさらに接近させている。そうした陳雲・李鵬・姚依林といった中国共産党内の知ソ派勢力の健在はソ連にとつても大歓迎であり、いよいよゴルバチョフ・鄧小平会談の実現の機会も出てきたと見ることもできよう。

わが国としては、国際環境全体の激しい動きの中で、「深部の潮流」を見きわめることがますます重要になるだろう。